

曼茶羅について

横地清恵

(一)

曼茶羅を整・統合、変遷の上から辿って、所謂、三本曼茶羅を考えてゆくと、胎藏図像、胎藏旧図様、現図曼茶羅という順位は、石田氏の次の様な説の如く、妥当・定説であろう。

胎藏図像は、インドの那蘭陀寺で修行した善無畏三藏 (Suharashita) が入唐後洛陽の大聖善寺において大日経の翻訳とあわせて経中の諸尊を描いた曼茶羅であることが、巻首や奥書の記述から知られる。胎藏曼茶羅の最も古い形を伝えており、二巻からなる卷子本である。胎藏旧図様は円珍が大中八年(八五四)の冬、越州の開元寺で、同伴の弟子豊智とともに写したのち日本に請来したもので、この曼茶羅の尊の配置は、仏陀瞿呬耶 (Buddhaguhya) のチハット訳大日経の系統にもとづき、

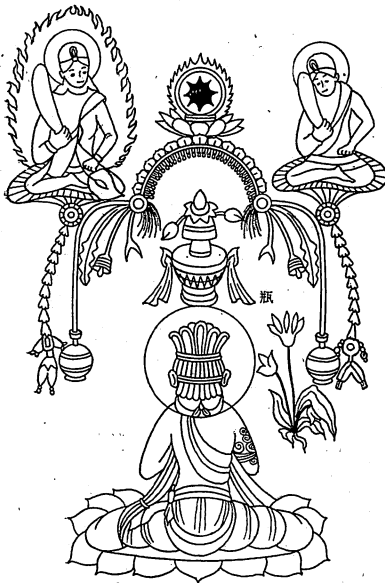
不空三藏 (Amoghavajra) の影響がみられ、現図曼茶羅も、これを踏襲してゐる。⁽¹⁾

現図・胎藏界曼茶羅は胎藏旧図様を改良整備した胎藏曼茶羅で、尊位の構成からいうと仏陀瞿呬耶・不空系に属する。⁽²⁾

現図・金剛界曼茶羅は、六種曼茶羅からなる五部心観より、さらに発達した曼茶羅で、九会からなる。尊像も増加して、かなり異同がみられ、胎藏三本曼茶羅の変遷を考えるうえに、きわめて重要である。⁽³⁾

胎藏曼茶羅の中軸ともいうべき毘盧遮那如来の一尊を比較しただけでも、如来形の胎藏図像と菩薩形の胎藏旧図様、現図という関係がみられ、胎藏図像と胎藏旧図様の間には、何かの变化の層があることが予想される。⁽⁴⁾

胎藏図像の虚空蔵部の主尊の位置に、虚空蔵菩薩が描かれて



虚空蔵菩薩の代わりに普賢菩薩

いないのはなぜであろうか。実は、この位置に第三重南門があり、門内中央に宝瓶、門上の両側に荷葉上棍棒をもつ二侍者を配し、門前に背面向きの普賢菩薩が描かれているためである。胎蔵図像はこれまで不空羂索経や一字仏頂輪王経によって裏付けられているので、両経中に虚空蔵を求めたところ、不空羂索経に「左手把三枝花葉、右手掌宝」(2070C)、一字仏頂輪王経には、「左手当胸執花、右手執如意宝珠、仰右髀上」(19230C)の記述を見出すことができた。そのため、もし、胎蔵図像に虚空蔵が描かれるならば、左手に花葉の枝をとって胸にあて、右手を膝において、手のひらに如意宝珠をのせた像であったことが推定されるが、現在片影すらうかがえず、完全に

消失してしまった像である。⁽⁵⁾

胎蔵図像には虚空蔵を欠くが、胎蔵図像の所依經典の不空羂索経や一字仏頂輪王経には、左手に花葉の枝をとり、右手に宝珠をのせる虚空蔵がみられ、胎蔵旧図様になると宝珠と利剣をとる像に一変する。この像には所依經典を見出しえず、阿闍梨の意案になる公算がきわめて多いことから、虚空蔵に新たに武力の象徴としての剣を導入するということは、唐王朝の権力思想との結びつきを暗示させるものがあり、その背後には金剛智、不空の金剛系の力が強く働いているようにも思われる。

毘盧遮那如来にみられるような胎蔵図像から胎蔵旧図様へかけての像形の変化は、以上の分析によって胎蔵旧図様の他の主要尊の随所にみられることになった。これらの変化像の所依經典を求めると、ほとんど不空の訳経につらなることとなり、胎蔵旧図様と不空との深い関係が認められる。このように不空の訳経によって金剛系の諸尊が導入されたことは、胎蔵旧図様の注目すべき特色であり、主要尊の変化の背後には、金剛頂経につながる般若や現趣系の力が大いに作用している場合が多い。⁽⁷⁾

以上、胎蔵旧図様の中核尊に、従来の胎蔵曼荼羅の伝統を破って、金剛智、不空を背景とする金剛系尊が、いかに熾烈に進出していったかを、密教図像を通して辿ってみたが、胎蔵曼荼羅における胎蔵図像から、胎蔵旧図様への断層は、そのまま唐代における善無畏から金剛智、不空への密教界の激動を如実に

伝えられるものといえよう⁽⁸⁾

(一)

ところで、この度の発表において、子島曼荼羅を取り上げたわけであるが、それも、殊に、胎藏圖像の虚空蔵部に描かれた普賢菩薩の消失ということを問題にした。ずっと以前、吉岡龍英氏も、二大西界曼荼羅(現図)のうち、高雄曼荼羅と比較して、子島曼荼羅の特異性を、次の如く述べて居られる。

相違せる点は蘇悉地院の角に在る可き瓶が虚空蔵院内に文殊院の角に在る可き瓶が釈迦院内に在り従つて、蘇悉地院文殊院は境界線なくして、外金剛部院に連接してゐることである。

即ち現図の前後四重、左右三重に対して、子島曼荼羅は四方三重の形式を採つてゐる。此れ現図系遡つては胎藏旧図様の組織と経及び儀軌系の構想内容とを相調和した一種の変質的形式内容を具備せる作品だと言へる。

そうすると、現図曼荼羅の子島曼荼羅で、四隅四瓶が、蘇悉地院から、虚空蔵へ、又、文殊院から釈迦院へという構成上の意味へも発展するとして、胎藏圖像の虚空部主尊として、普賢菩薩の出没をどう把えるかが、当面の課題となつた。四瓶が毘盧遮那如来四徳のシンボルであることは、金剛系の進出に依る如来形、菩薩形という変化像に伴なつて、配置に転換を見たのは、当然といえよう。従つて、毘盧遮那如来を扱かうのも、そう遠くないだろ

う。さて、こういった変遷史上の先触れとして、普賢菩薩の出没を捉えたとき、天部諸尊の変遷過程が、第一に上ってくるのは当然だ。天部の位置の相違で、二大系に別けられるのが一般であるが、四隅と南方の閻魔天が共通していることは、解釈を合理的なものにする大切なことと思われる。

十二宮は天宮における太陽の運行を十二分し、一月に一宮ずつ進み、十二月をもつて一周するというインドの曆法にもとづくもので、占法にも、応用された。九曜とともに胎藏曼荼羅の矢部に描かれているが、胎藏圖像には宮名の下に数字が散見され、それによると獅子宮を一月とするのと異なり、春分点にあたる羊宮を起点とするもので、普通、10は双鱼宮、12摩竭宮と入れ替つているため、図像対照表の配列も胎藏圖像の順位に従つた。十二宮には、これまでのように胎藏圖像—胎藏旧図様対現図の關係は3双童男童女宮6童女宮9弓宮10双鱼宮にみられるが、三本共通するものもある。なかでも、胎藏旧図様は獅子宮、秤宮、羯宮などのように動物を独立させず、動物と像とを結合させる傾向がある。

(二)

これらの図のうち、吉祥宝瓶宮(胎藏圖像)↓瓶宮(胎藏旧図様)↓賢瓶(現図)である。野尻抱影氏は、鎮星の真下にあたる宝瓶宮などは、西方の水瓶から、唐風の華麗な壺に変わつて、左

右に赤いリボンを下げてゐることを述べておられる。金剛部の進出を掘り下げるほかに、跌座形をインド国から史的に辿る発展方法、胎蔵圖像の固定化されない自由な動き（冠上に日月頭飾、布帛が翻る、リボン）のイラン的要素を、更に、一層深く追求する必要がある。

- (1) 石田尚豊「曼荼羅の研究」四頁
- (2) 同書 四頁
- (3) 同書 五頁
- (4) 同書 一五頁
- (5) 同書 一〇三〜一〇四頁
- (6) 同書 二五頁
- (7) 同書 二六頁
- (8) 同書 二七頁
- (9) 「ピタカ」六七頁
- (10) 石田尚豊「曼荼羅の研究」一六八頁。

なお、図像については、一六九〜一七一頁を参照。

(よこち・きよえ、日本史学、都立北園高校教諭)